

ほうじょうたんこうだいばくはつ

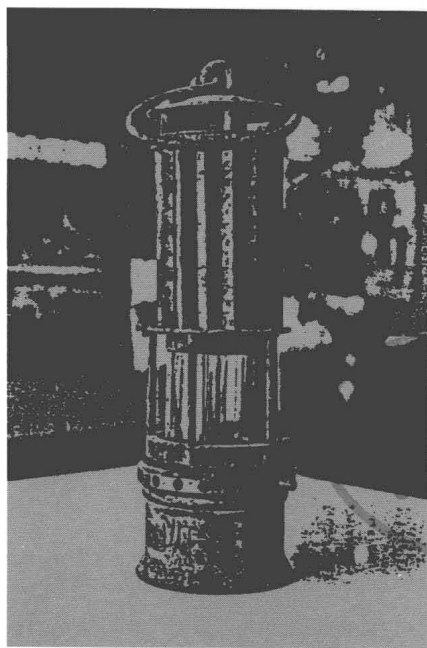
なぞの方城炭坑大爆発

織井青吾著



なぞの方城炭坑大爆発

織井青吾 著



国土社

◇著者紹介 織井青吾

1931年広島県に生まれる。現在著述業。

小説，評論，ルポルタージュなどを
書き『地図のない山』（光風社出版），
『方城大非常』（朝日新聞社），『流民
の果て・三菱方城炭坑』（大月書店）
などの著書がある。

「炭坑犠牲者と手を結ぶ会」代表世
話人。

現住所 〒186 東京都国立市
谷保 2867

916

織井青吾

なぞの方城炭坑大爆発

国土社 1981

p. 168 20cm×16cm

基本カード記載例

なぞの方城炭坑大爆発

一九八一年二月二五日 初版一刷発行

著者 織井青吾

発行者 長宗泰造

発行所 株式会社国土社

東京都文京区目白台一―十七―六
〒一一二 電話九四三・三七二―
振替 東京六―九〇六三一

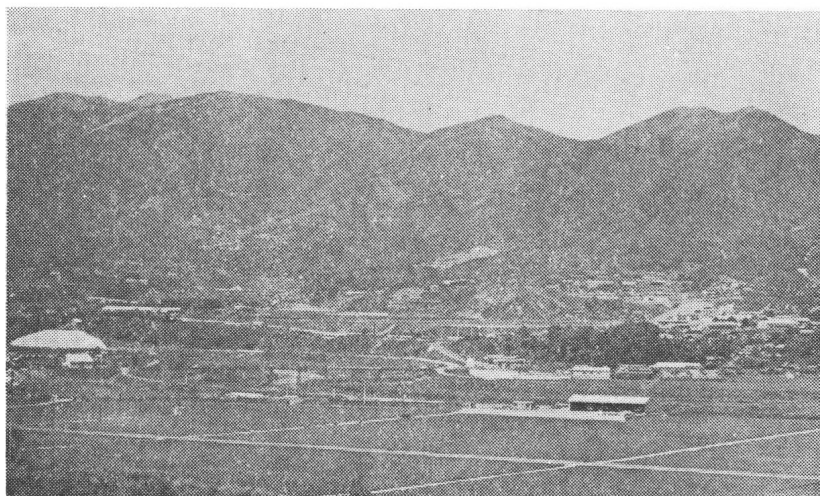
印刷 株式会社厚德社

乱丁々魔丁の本はお取りかえします

©Seigo Orie 1981

ISBN4-337-05601-7 C8091

なぞの
方城炭坑大爆発



現在の方城町

はじめに

戦争とか大きな災害さいがいなどがあると、かならず多くの犠牲者ぎせいしやがでる。が、またそのなかで危あやうくいいのち拾いいをする人もいる。つまり助かった人たちである。これらの人々を生きのこった人といいかえてみよう。

こうして生きのこった人たちは、不幸にも亡なくなった人たちにかわって、それからあとの人生をどのように歩んでいけばいいのか。そのことを、まずじっくり考えてみる必要があるひつようはしないだろうか。

わたし自身中学校三年生のとき、広島ひろしまの原子爆弾げんしばくだんによってかなりの火傷やけどを負おい、そして、多くのクラスメートを失った。いわば、生きのこりのなかのひとりである。

そんなわたしは、広島に原爆が投下された八月六日という日がやってくるたびに、死んでいった仲間たちにかわって、いったいわたしはこれから何をやっていったらいいのか——そういったことを、考えつづけてきたのであった。

そのような思いでいるわたしを、九州福岡県きゅうしゅうふくおかけんの旧筑豊炭田地帯きゅうちくほうたんてんちたいがみちびいたのでもあろうか。わたしは、はからずも、わが国で最大の炭坑事故たんこうじこをおこした「三菱方城炭坑みつびしほうじょうたんこう」のあった福岡県田

川郡方城町という地に出会うのである。

時は、いまから半世紀をこす六十六年まえの大正三年（一九一四）十二月十五日、この大惨事は起こったのであった。そうして、いまだにあがらない多くの遺体があることに間もなく気づき、わたしは身ぶるいを覚えた。その事件を知らなかったとはいえ、この方城町でわたしは、亡くなった人たちの骨の上を歩いていたのであった。

しかも、この大災害はいまだに爆発の原因についても明らかにされておらず、犠牲者のほんとうの数もはつきりしないという、多くのなぞにつつまれたままなのである――。

こうして、いのちを奪われていった多くの犠牲者たちの魂とともに、わたしは五年ちかい歳月をかけて、この大災害にとり組んでいたのだ。

はじめに……………	2
-----------	---

1 みぞれの降る朝 9

みずゆき……………	10
-----------	----

炭坑……………	16
---------	----

地底からの声……………	21
-------------	----

2 地獄の唄 27

こちら直方七番……………	28
--------------	----

みかんが天から降ってきた……………	33
-------------------	----

ある決死隊員の死……………	35
---------------	----

地底からの脱出……………	36
--------------	----

助けて！……………	42
-----------	----

ゾウの鼻……………	45
-----------	----

あがりよるぞ！	47
コスモスの花は枯れていた	50
牛が走った	52
その女はだれか	53
名前のない遺体	56
絶望	59
孤児	64

3 スネヌキ坑夫になぜなつた 69

農民から炭坑夫へ	70
赤いエントツ	76
広島もん	80
納屋の正体	82
子ども坑夫	87
職員の葬式	93
どうしてこんなに死ぬるのか	94

4 勅使ちよくしが村にやってきた 99

炭坑たんこうの便所 100

生き神様 103

一本の鉛筆えんぴつ 106

見舞金みまいきんはもらったが 111

方城子ほうじょうこ守唄もりうた 113

正月? 115

5 死んでいった人たち 119

馬は十一頭、人は? 120

消えた納屋なや 123

招魂碑しょうこんひは語る 125

人の噂うわさはホントであった 130

千人をこえる死者 134

6 なぞの爆発原因ばくはつげんいん 137

原因不明 げんいんふめい という名の原因？	138
発見された目黒レポート	144
おそるべき炭じん爆発 ばくはつ	149
十七年ぶりの遺体 いたい	153
方城非常唄 ほうじょうひじょううた	156
「あとがき」にかえて	163

Ⅰ

みぞれの降る朝

みずゆき

いつもは校庭のかなたに、くつきりとした姿を見せている香春岳^{かすらだけ}も、きょうだけはぼんやりと
かすんでいる。

みぞれが、はげしく降りそそいでいた。

ちかくから、方城炭坑^{ほうじょうたんこう}の赤い煙突と高いやぐらが伊方尋常高等小学校^{いかたじんじょう}の校舎^{こうしゃ}を見降^{みくだ}していた。

この小学校のある福岡県田川郡方城村^{ふくおかけんたがわぐんほうじょうむら}は、明治時代^{めいじ}のなかばころからのすごい勢いで発展して
きた筑豊炭田^{ちくほうたん}のなかにあった。村は、彦山川^{ひこさんがわ}にそそいでいる伊方^{いかた}、白鬚^{しらが}、金辺^{きべ}、弁城^{べんじょう}などの支流
にかこまれたゆるやかな丘陵^{きゅうりょう}のなかにひろがっていた。

伊方小学校の生徒たちは、みぞれのなかを勢いよく教室にむかった。わらじをはいただけの彼
らの素足^{すあし}は、ひびわれ、ぬれていた。

「みずゆきば、止み^やそうもなか。」

だれかが、そんなことを口にする。

みずゆきとは、このあたりでいうみぞれ^{みぞれ}の方言^{ほうげん}であった。雪にもなれず、そして雨の水にもな
れないということから、みずゆきと呼ばれるようになったのであろうか。



昭和のはじめころの方城炭坑

「でも、炭坑^{たんこう}ん中よりややかやろ。」

それを口にしたのは、おそらく炭坑夫の子どもであろうか。

二時間目の授業のはじまりをしらせる鐘^{かね}の音が、校庭に鳴りひびいた。午前九時三十分であつた。

間もなく、五年男子組^{たんじん}の担任である大場栄先生^{おおばさかえ}が姿^{すがた}をあらわした。

「起立！ 礼！」

級長の号令で四十人たらずの生徒は、いっせいに立ちあがつた。きょうも欠席児童がめだつた。

「よおし、着席。」

欠席が多いというのは、各クラスとも半分以上が炭坑夫の子どもたちによつて占め^しられていたということである。

彼らは、家が貧しいため、働いているものが多いのだ。男子は、一足一銭^{かずせん}になる坑夫のわらじづくり、女子は共働き坑夫の子守りを十二時間して十銭がもらえするというわけだ。



学生時代の大場栄先生

あった。

出席簿しゆつせきぼを下におろし、チヨーク箱ぼくに右手をあてると大場先生は、

「二九ページを開け。第十六課「道徳」、これから先生が読む。よう聞いちゃけ。」

そういつて、大柄おおがらな身体からだに似合にわず小さい声で教科書

を読みはじめた。

二時間目は「修身しゆしん」である。道徳という科目のことを、昔の日本ではそう呼んでいたのだ。

『人は常に礼儀を守らざるべからず。礼儀を守らざれば人をして不快の念を抱かしめ又品位を損ずるものなり。されば言動挙動きやうどうをつつしみ、身なりをととのへ、食事の際不作法ふさぽうに流れず――』

小学校五年生の教科書にしては、かなりむずかしい文章であった。

大場先生は、ここでひと息つくと、教室をひとまわり見まわし、意味の説明をはじめた。

「礼儀れいぎを守るちいうこつは、どこへ行っても日本国民の守らにゃいけん最も大事なことや。わかっちゃうな。」

「はーいっ!」

みんなは、いっせいに答えた。

それから、大場先生は、

「いま先生が読んだとこ、最初から読め。」

と、生徒を指名した。

「はいっ！」

名前を呼ばれた生徒は立ちあがり、教科書を両手にした。

みぞれが、かわらず教室の窓をうちつづけていた。すこしは風もでてきたらしい。

大正三年（一九一四年）十二月十五日。火曜日。

時計は、午前九時四十分をさそうとしていた。

「人は……常に……」

生徒の声がもれた。いつもとかわらぬ、教室風景である。

その瞬間であつた。

天地が裂けたかと思われるような、すさまじい音が教室をつつんだ。床がゆれ、窓ガラスが破れ、チョーク箱が教卓からはねあがつた。

「非常や！」

男生徒のだれかが大声で叫んだ。

非常という、その声を耳にしたとたん、ワッ！ という泣き声、叫び声があちこちからまきおこり、たちまち教室中にひろがった。非常がなにを物語っているかを、子どもたちは肌身にしみ



昔の香春岳

て知っていたのだ。

「静かに！ みんなあわてちゃならん。」

泣きじゃくる生徒たちにとりかこまれた大場先生の声も、いつもとは違い、ふるえていた。顔もひきつり、青ざめている。

その大場先生を中心にできた生徒の輪は、いつの間にか教室から廊下へと移っていった。生徒たちは、さきを争って廊下の窓から首をつきだした。香春岳の見える校庭とは反対の真正面が、ちょうど三菱方城炭坑の方向にあたっていた。

火柱のまじった黒い煙が炭坑から吹きあげ、高くそびえたつやぐらをたちまち包んでしまった。その黒い煙の上の方から大きな坑木が舞いながら落ちてくる。渦まいていた煙は、やがて黒いキノコ形の雲になって方城村の上空にひろがってゆく。

すると、塀ひとつへだてた伊方小学校の前の道を、方城炭坑の方にむかって駆けあがってゆく人の波が、